

真弓さんの原動力は大切な伊折の仲間^{いおり}

小谷村の伊折農業生産組合の伊折の里^{いおり}「伊折農山村体験交流施設ゆきわり草」で企画・運営を行っている藤原真弓さんを訪問し、素敵な古民家（ゆきわり草）でお話をお聞きました。



まさか、自分が農業をやるとは思ってもいませんでした。1996 年東京から小谷村に 1 年ほど仕事で来たことがきっかけで夫と知り合い、小谷（伊折）に嫁ぎ、あっという間に 20 年です（笑）。

小谷へお嫁に行くことについて、ご家族や友人からは何か言われましたか？

両親はそれぞれ地方出身で、逆に私より田舎の暮らしを分かっていたので、「なぜあんたはそんな雪の多いところに行かなきゃならないの」、「あんたには無理よ」みたいなことを言われましたね。

一番の親友なんて「真弓をこんな遠くまで連れてきて」っていうような目で夫のことを頭から足先までにらむように見ていたらしく、夫も怖かったと言っていました。（笑）

伊折農業生産組合、ゆきわり草の起ち上げについては？

義父が定年の頃、荒れていく田を見るに忍びないとの思いから、仕事の関係で重機を扱えた関係もあり、田の整備等を一人で始めました。その時は、家族も集落の人も最初は何をやり出したんだみたいな。

伊折の近くの小土山でキュウリの集落営農をやっていた「こんぴら営農集団」というのがあって、そこと同じ様なことをやりたくて、平成 17 年に山菜の出荷、棚田オーナー田、ミニトマトの生産、雪中キャベツの生産等を行う伊折農業生産組合を集落が一丸となって起ち上げました。

また、この「ゆきわり草」は空き家だった民家を再生したもので、義父の構想では農家レストラン（自身でシェフも）のようなものをやりたかったようでしたが、完成を見ずに亡くなってしまって、成り行き上私たちがやることになり、どうしたらいいかなと考えていた時に地域おこし協力隊の方が、わら細工、布草履等を作る体験をここでやったら？ということで、農山村体験交流施設として平成 25 年にオープンしました。

ゆきわり草の宿泊者の食事は真弓さんが全部作るんですか？

得意ではないですけど（と前置きがあり）、毎回の宿泊者の食事はもちろん、小谷村の姉妹都市でイギリスから大使が来たときのランチも対応しました。その後に、大使が喜んで帰られたと聞いて、美味しいものは分かってもらえるんだなあ。またこの時、村の担当者も随行で来ていて、出した料理を食べたところ「公民館（伊折）の味だ」と言ったんです。「その言葉って、私にとっては最高の褒め言葉です。」（これって伊折ブランド？）

その料理の元となっているのは、伊折のおばあちゃん（義母）達が料理上手で、それを自分が今まで食べているから。素材も地元でとれる野菜や山菜、卵も自分のところで飼っ

ている鶏から。都会の方はおいしい物をたくさん食べているので、ここに来たときは、ここの取れたての自然のおいしいものを食べてほしいし、また、今まで来た方もそれを「美味しい」と言ってくださいましたね。

真弓さんは自らを食いしん坊と言っていましたが、食育について関心が高く、真弓さん自身農村生活マイスターとして先輩マイスターさん達と小学校などで郷土色のやしょうま作りなどを教える活動をしているそうです。また、伊折には食育の材料がそろっているといえます。

おばあちゃん達が保育園を手伝ってジャガイモを植えたり掘ったり、教えなくても一緒にやるだけで食育になる。ミニトマトの嫌いな子が、おばあちゃん達と作業体験したことで「伊折のミニトマトだよと言うと食べるんです」という話を保育士さん達から聞いて、これって食育だなと思って。

おばあちゃん達と触れ合ったこと、人と人がもっと身近になるということが、本当の意味での食育ではないかなと。そして、おいしい野菜を食べてないから野菜嫌いになると思う、たぶん。伊折の野菜はおいしいと思いますよ。

真弓さんの「ふるさと」となった伊折については？

伊折は小さい集落なので、元々まとまりがいい集落です。みんなでやるぞ！っていう感じのことが多くて、伊折農業生産組合も一人じゃ大変だけど、みんなでやれば楽しくできるっていうのがモットーです。

また、娘が具合悪くなったとき、あっちこっちから「だいじょぶかい？」と声をかけてくれたのにはビックリ。長野でもこんな所、もう珍しいですよ。（喜）

近所のお宅の小さなお子さん達を、家の孫みたいなもんで、と話す真弓さん。

この間、小学校の先生から聞いた話なんだけど、子供達にアンケートで「将来ここに帰って来たいか」との質問をしたところ、全員が「帰って来たい」との回答だったと聞いて、なんかうれしくなっちゃって。まだ都会の暮らしとか知らないからかもしれませんが、最低でも、今地元が良いと思っていることがすごいなってね。

今の課題としては、伊折のおばあちゃん達が高齢化していくので、年を取っても出来ることがあればいいかなと模索中だそうです。

デイサービスに行っても思うんだけど（真弓さんは介護の仕事もしているとのこと）、おばあちゃん達は人に何か教えてあげたいんですよね。だからいつも介護される側になると、お世話になっちゃってことに。

今は食材の提供とか、お豆を煮てもらったりとか、羊羹づくりが得意なおばあちゃんには羊羹を作ってもらったり、色々な農作業や料理のやり方を教えてもらったりとかしているけど、組合発足時は60代だった人たちがだんだん年を取って、体力も衰えていくし、気力も衰えていくけれど、そういうおばあちゃんでも人との繋がりみたいなものが大切だと思うんです。おばあちゃん達知恵は一杯あるから、自分が役に立つんだということを実感出来るものが見つかればいいかな。

真弓さんは「農村生活マイスター」になったこと、「女性農業次世代リーダー育成塾」に行ったことが大きな刺激になっているそうです。

マイスターが千人もいることに驚き、様々なスタイルで農業をされていることにもびっくりしました。若い方がすごく頑張っているんだということも分かりました。そして、みんなすご〜く悩みながら、工夫しながらやっていることも感じられて刺激を受けました。

また、昨年農業女子のコアメンバーに選んで頂いて、「育成塾行った方が良いよ」の仲間の声に誘われて、今年育成塾に行ったんだけど、そこで良い出会いをいただきました。北海道から九州まで35名の仲間と知り合え、そういう仲間がいることがすごく励みになっています。

次第に荒れていく田をみて忍びないと始めた伊折農業生産組合。おじいちゃん達がやってきた10年、これから私たちが作っていかなくちゃいけないという世代になってきた時に、マイスターや育成塾から色々考える材料を与えて頂き、そのことがとても良かったと思っています。

色々活動されていて大変そうですがストレス発散法は？

温泉が好きなので温泉に行ったりカフェに行ったり、友達と食事をしたりしています。

話しをすれば結構発散してるんじゃないかな。それにそんなに溜めてばかりもいられませんから。

これからやりたいことはありますか？

園芸品目を増やしたり、自分たちで直売したり、加工品を手がけたりしたいなと色々考えてはいます。

ま、やりたいことは沢山あるけど、まずは一人でも多くの方に伊折（ゆきわり草）を知ってもらって、来てもらって、最終的には住んでもらうということかな。

どこの市町村でも同じかと思いますが、どんなに良いものがあっても、過疎地域だと人が住まないことには維持できないし、伝統とか文化とか自然環境も無くなっていってしまう。なんとか住む人、定住する人が増えてくれればという想いでやっています。

こんな良いところだから残してあげたい。

後、もうちょっと儲けたいけどね（笑）。そうすればいろんな幅が出来るし、若い人を何人も雇うことも出来る。あーだこーだ考えながら、若い人との意見を聞きながらやっています。



居心地の良い古民家で、熱く語ってくれる真弓さんの話に聞き入って、あっという間に時間が過ぎてしまいました。真弓さんの話を通じて伊折のおじいちゃん、おばあちゃんがすごく身近に感じられ、伊折にまた来てみたいという思いに駆られました。貴重な時間お話ありがとうございました。